



愛のすきまで交わって

矢野 涼真



## 序

街の中心部にほど近い、高級マンションの一室。

部屋数の少ない上層階にあつて防音も完璧に近いため、隣人トラブルなどとはおよそ無縁の4LDKは、昼に入った家事代行業者によつて今日もしっかりと清潔が維持されていた。

「……ふん」

立入禁止の札が掛かった小部屋には、ガウン姿の男。

まるでどこかの社長室にでもありそうな革張りの椅子に座つて、黒檀の机上に置かれた大型モニターを冷ややかな目で見つめている。

「あ、あつ、ああんっ！　すごい、すごいのお！　だめ、だめっ！　もうだめえっ！　いく、いくつ、いく、いくつ、いつちやううううっ！」

傍に備え付けられたスピーカーから流れてくるのは、あまりにもけたたましすぎてほとんど騒音と化した、嬌声。

「全く……うるさい女だ」

いかにもつまらなそうな顔で吐き捨てる、男はクリエイターが使うようなスペックの高いパソコンの本体から、DVDを取り出した。

〈二十四歳OL・香菜子 その4 完〉

手書きのラベルが貼られたプラスチックケースに、円盤をそっとしまい込む。

「まあ、いいか。どうせこいつも、もう願い下げだしな」

呟きながら立ち上がると、壁際にそびえる本棚の前にゆっくりと歩を進めた。

「よっ、と」

鍵付きの重厚な扉を開く。

中には、手にしているものと同じタイプのディスクケースがずらり。

〈二十二歳女子大生・千佳 その1〉

〈三十一歳シングルマザー・康恵 その2〉

〈三十八歳未亡人・綾乃 その3〉

などと記されたケースが、綺麗に列をなしてびっしりと並んでいる。

「これでよし、と」

棚にさらなる一枚を追加すると、男は薄暗い部屋を出てリビングへ向かった。

しやれたバーカウンターに足を踏み入れ、いかにも値の張りそうなクリスタルガラスの杯を戸棚から引つ張り出すと、冷凍庫からいくつか氷をつかんで中に放り込む。

「ふむ……」

数秒、熟考。

「今日はこいつでいくか」

手を伸ばして引き寄せたのは、豪華な装飾が施されたウイスキーボトル。

「ほっ」

慣れた手つきで栓を抜くと、澄んだ琥珀色の液体を氷の上からとくとくと注いだ。

「では、エンディングを祝して、乾杯」

顔の前にひよいとグラスを掲げてから、一口目を軽く舌に染み込ませる。

「ふう……」

満足そうに深い息を吐くと、男は静かな足どりでキッチンを出た。

趣味のいいソファとテーブルが置かれた広いリビングを通り抜けて、横に大きな窓の前で

ぴたりと立ち止まる。

眼下に煌めくのは、渦巻く人間の欲望を覆い隠すかのような、眩い夜の景色。

「さて、次は……」

ちかちかと瞬く街の灯を見下ろしながら、男が口を開く。

「そろそろあれを、狙ってみるとするか」

芳醇な香りと味わいに湿った唇から、ささやかな呟きがこぼれた。

街外れの一角に、借家がある。

一応一軒家ではあるが、敷地は狭く庭もない小さな平屋建て。築年数は優に四十年を超えており、間取りもやっとの1LDKだ。立地や交通の便もよくないため、どう甘く見積もっても高額の家賃は設定できそうにない。

そんな安普請のリビングで話をしているのは、妙齢の女と中年の男。

小さなテーブルを挟むように一台ずつ置かれたソファーに座って、膝を突き合わせるように正対している。

「あの……もう一度、仰っていただけますか？」

古沢希恵子（ふるさわきえこ）は、自分が何を言われたか分からないといった顔で、眼前の男に聞き返した。

「ですから」

黛匡一（まゆずみきょういち）は言葉を一つ挟むと、

「お宅の旦那さん、和臣（かずおみ）くんには五百万の借金があります。しかも消費者金融で借りているので利息はかさむ一方。そのうち首が回らなくなる危険があります」

落ち着いた低音で淡々と同じ説明を繰り返す。

「ご、五百……万……」

ようやく事態が飲み込めてきたのか、涼やかな希恵子の声がだんだんと震え始めた。

肩まで伸びたやや癖のある黒髪に、細く伸びた美しい眉。柔和だが意志の強さを感じさせる瞳は宝石の輝きを放ち、通った鼻筋と潤った唇は見る者を否応なく惹きつけた。白ブラウスにベージュのスカートというぱっとしない格好だが、地味な服装の下にむっちり柔らかかな魅惑の肢体が隠れているのは一目瞭然である。

「そんな、大金……」

二十八という年齢を迎え、端麗な容姿にさらなる磨きがかかっている希恵子だが、今はその白い肌をさらに青白くして挙動不審に目を泳がせるばかりだ。

「本当は奥さんには秘密で、という話だったんですがね」

希恵子の狼狽ぶりをじっくりと舐めるように観察しながら、黛が話を続ける。

「それではあんまりですし、私にちよつといい考えがあるものですから、和臣くんには内緒でこうしてお邪魔させてもらいました」

今年で四十三歳になる黛だが、外見からくる印象はそれより随分と若い。

白髪や薄毛とは無縁の豊かな髪と艶のいい褐色の肌が、精悍な顔立ちによく似合っていた。グレーの高級スーツに包まれた身体はしっかりと締まっており、メタボなどとはおよそ縁遠い体型をしている。

希恵子と黛は、今日が初対面であった。

夫の和臣から行きつけのバーで知り合つたと名前だけは聞いていた希恵子だが、実際に顔を合わせるのはこれが初めてとなる。

「夫がいつもお世話になっております」

突然の不躰な来訪者にも礼儀として一応頭を下げた希恵子だが、胸の内では全然違ふ感情を抱いた。

(嫌な、感じ)

それが希恵子から見た、黛の第一印象。



遊び慣れた感じの風貌にぎらついた雰囲気をふんぷん醸す鋭い目つきが不快感を誘った。

和臣より一回りも年上だが、温厚でいかにも善良そうな夫と比べると油っぽいエネルギーの差は歴然。こういうタイプの男が、希恵子は昔からどうにも苦手である。

だが今は、自分の好みをどうこう言っている場合ではない。

「お、夫は、なぜ借金を？」

絞り出すように、希恵子が尋ねた。

「どうやら投資に失敗したようです。FXか何かだったらしく、元手よりもマイナスになってしまったんですな。で、それを取り返そうと焦ってさらに手を広げ、気がつけば借金まみれになっていた、と。そういうわけです」

黛は冷静に、講義でもするような調子で経緯を説明する。

「そ、そんな、ことが……」

希恵子はそう言ったきり、二の句を継ぐことができなかつた。

にわかには信じがたい話だった。真面目で誠実でお人好しが取り柄の和臣がそんな大それた真似をするなど、希恵子には想像すらできなかつた。

「失礼ですが、その……し、証拠はあるんですか？」

「証拠ですか？ ええ、ございますとも」

詰め寄る希恵子をいなすように笑うと、黛はスーツの懐へ手を伸ばした。

「こちらを、お聞きください」

小型のICレコーダーを取り出し、再生を始める。

「黛さん、僕は……僕は、もう駄目です」

「！」

その一言を耳にした瞬間、希恵子は大きく目を見開いた。

それは自分が愛する夫の、誰より間違えようのない男の、初めて聞く絶望に満ちた、声。

「落ち着くんだ、和臣くん」

「そう言われても、こんなことになってしまつて、僕はもうどうすればいいのか……」

ぐす、と鼻水をすすする音が、スピーカーから耳障りに響く。

「最初は、ちよつと小遣い稼ぎをするだけのつもりだったんです。希恵……妻には僕のせいで苦勞ばかりかけてますから、少しでも家計を楽にできればと……なのに、何で、こんな……」

黛はレコーダーの電源を切ると、そのまま機体をスーツの内ポケットに戻した。

「ま、お聞きの通りです。奥さん思いのいい旦那さんですね、和臣くんは」

「……」

ほとんど嫌味にしか聞こえない黛の言葉を、希恵子は沈黙で受け流した。

和臣は演技ができる性格ではない。嘘をつけば声や態度にはつきり出る。それがこころも真に迫った言葉を吐くということは、借金は存在するとみて間違いないのだろう。

実際、古沢家の財政事情は苦しかった。

和臣の勤務する会社は元々社員の待遇がいいわけではなく、当然給料も安い。

和臣自身も決して要領のいいタイプではなく、ほどほどに働いて報酬だけ手にする発想とは無縁。それどころか、定時に仕事が終わらないのは自分の責任だからと進んでサービス残業をするほど生真面目な性格であるため、収入アップなどは初めから望むべくもなかった。

希恵子も家計を預かる主婦として精一杯切り詰めてはいたが、それにも限界がある。

「わたしも、何かお仕事した方がいいと思うんだけど……」

「うーん……それは……どうかなあ……」

一時はパートに出ることを考え、和臣に相談してみたこともあったが、返事はあまり芳しいものではなかった。

多分、男のプライドというやつだろう。

希恵子からすれば何とも理解に苦しむ感情ではあったが、それでも夫を傷つけてまで働きに出るのは自分の意に反した。

だが――。

(あの時、わたしが……)

多少無理を言っても働きに出ていれば、こんなことにはならなかった。

自分の遠慮が最悪の方向に転がってしまったのを悟って、希恵子は深い後悔の念を覚えずにいられない。

(気づいてすら、あげられないなんて……)

いかに夫を信じて疑うことがなかったとはいえ、隠し事の下手な和臣のこと、注意深く観察すれば必ずどこかに異変は見えただはずだ。

にもかかわらず、希恵子はぼんやりと日常を過ごすうちにそれを見逃してしまった。

別にわたしが借金を作ったわけではない。

いくら夫婦でも、打ち明けてくれないものは分かりようがないだろう。

そもそも働きに出なかったことだって、夫の強い意志を尊重したからではないか。

そんな風に自分を正当化して、全ての責任を和臣に押しつけることができれば、話は簡単に終わったかもしれない。

だがそれをするには、希恵子の性格はあまりに潔癖で、あまりにも純真すぎた。

「っ……」

妻として大事な何かをおろそかにしてしまった罪悪感が、希恵子の心を追い込むようにちくちくと刺す。

「それでね、奥さん」

黛がタイミングを見計らったように身を乗り出し、顔を上げた。

「聞いていただけですか？ 私の話」

「え、ええ」

私にいい考えがある、という黛の言葉が、希恵子の耳に蘇ってくる。

「実は和臣くんの借金、立て替えてあげる準備があるんですが……」  
「え？」

意外な言葉に、希恵子は目を丸くした。失礼だが、この黛という人物がそんな義心あふれる男だとはとても思えなかった。

「いくらグレーゾーンが撤廃されたといっても、この手の金利はやはり高いものです。放っておけばどんどん金額が膨らんで、ついには利息を返すこともままならなくなるでしょう。でもここで私が立て替えれば、それは私への個人的な借金になります。そして私は、利息など取る気はさらさら、これっぽっちもありません」

黛が、親指と人差し指で小さく「これっぽっち」を示してみせる。  
「……」

希恵子は黙り込んだまま、相手の真意を探るように、その指先をじつと見つめた。  
確かに、いい話ではある。

五百万が大金なことには変わりはないが、元本だけ返せばいいならかなり気は楽。とりあえず雪だるま式に借金がかさむ心配がなくなるだけでも十分にありがたい申し出といえた。

だがそれでも、希恵子の脳裏をちかちかとよぎって離れないのは「警戒」の二文字。

「なぜ、そんなことを……仰ってくださいるんですか？」

「酒場だけの付き合いとはいえ、和臣くんは大事な友人ですから」

訝しげな希恵子に対し、黛は笑って肩をすくめながら鷹揚な調子で答えた。

「でも、五百万なんて大金……飲み代を立て替えるとかじゃないんですから……」

「あー、実は私ね、学生時代に起業をしたんですよ」

戸惑う希恵子に突然そんなことを言うと、黛は遠い目で窓の外を見つめる。

「友人二人と一緒に、コンピューター関連の会社をね。当時はまだ珍しかったこともあって、

そこそこ大きくできました。会社自体は数年で買収されましたが、株の売却でまとまった金が残りましてね。それを投資に回したら運よく結構な財産を作ることができたんです。いわゆるITバブル長者ってやつなんですけど、お陰さまで今も働かずにのんびり暮らせています」

「はあ……そうですか」

要は単なる金持ち自慢か。

そう思った希恵子だが、ここは仕方なしに気のない相槌を打っておく。

「そんなわけですから五百万プラス現段階での利息くらいなら今すぐにもご用立てできるんですよ、私。せつかくある金なんだから、有意義に使った方がいい。今こうしているうちにも利息はどんどん増えていくので動くなら早い方がいいと思いますが……いかがですか？」

話を本筋に戻すと、黛は急かすような調子で決断を促した。

「……」

希恵子は、迷う。

咄嗟の判断で決めてしまうにはあまりに問題が大きすぎるし、そもそもこれは自分で勝手に決断していい性質の話ではない。

「……お話は分かりました。仮に立て替えていただくにしても、返済の方法とか色々と問題がありますし、まずは夫と相談させてください。その上で改めて――」

「おっと、ちよつと待って下さい、奥さん」

ひとまず逃げを打とうとした希恵子を、黛が手を上げて制した。

「和臣くんには一切秘密で。話したら、この件は全部なかったことにさせてもらいます」

声を潜めて、そう言葉をつなげる。



「……え？」

いきなりの条件に、希恵子の顔が不審そうに曇った。

「まあこの場合、秘密にしないと困るのはむしろ奥さんということになるでしょうけど」

「……？」

持って回った言い方でもったいぶる黛を、希恵子はさらに怪訝な表情で見つめる。

「さつきもお話しした通り、私は金銭面では十分な余裕があります。返済など不要だ、とまで豪気にはなれませんが、どうせだったら他の、もっと価値があるもので返していただいた方がありがたいですよ」

黛の声音が、じわじわと圧力を増した。

「もっと価値があるもの……ですか？」

一方希恵子は、単純な鸚鵡返ししかできない。

「そう、価値があるもの」

「何でしょう。うちにはそんな財産なんて……」

同じ言葉を繰り返す黛に、希恵子がますます分からなかった表情で首を傾げた。

「あるじゃないですか。とっておきの、極上品が」

薄暗く濁った光を眼に宿しながらそう言うと、黛は胸の前で両手を組み、右足をゆつくりと左膝に重ねる。

「あなた自身ですよ、奥さん」

「！」

希恵子の顔から、さつと血の気が引いた。

「そ、そんな……」

一瞬のうちに、全てを理解する。

この黛匡一という男の目的は最初から自分、いや、自分の身体だったのだと。

借金で自分を縛りつけた上で辱め、陵辱し、慰みものにする。

それしか、考えていないのだと。

「そんな、こと……」

胸に渦巻くこの感情は、恐怖だろうか、それとも怒りだろうか。

おぞましいほどの寒気が希恵子の背筋を一気に駆け抜け、ざわざわと総毛立つような感覚が

全身を包んだ。

「しばらく……そうですね、三ヶ月ほど私のものになってください。そうすれば、立て替えた借金の返済は無用、全てを帳消しにしてあげます。もちろん和臣くんにもうまく理由を付けてこちらから説明してあげますよ」

そう言つて一見紳士然とした笑みを浮かべる黛に、

「わ、私のものつて……」

希恵子は身をすくめたまま、すっかり言葉を失つてしまう。

「なーに、どうつてことはありませんよ。奥さんがちよつと割り切りさえすれば、全てが丸く収まるんです。簡単な話でしょ？」

「なっ……」

軽い調子で自らの見解を述べる黛を、希恵子が剣呑な目で睨みつけた。

だが、それ以上何ができるといふわけでもない。

夫婦とも既に両親はなく、親戚付き合いもゼロ。金策のあてなどまるでない二人にとって、黛の提案を蹴ることは即ち身の破滅を意味している。

「っ……！」

喉の奥に熱い塊をつかえさせながら、希恵子が美しく整った顔を苦しそうに歪めた。

「まあ、どうしても断るといふなら止めはしません……その時はこのお話、全部パーです。せいぜい夫婦仲よく、借金地獄を歩んでください」

「な、何て……酷い人……」

もはや脅迫の色を隠しもせずに滔々と押し込んでくる黛に、希恵子はやつのこと一言、非難を返す。

「ふむ、酷い人、ですか……」

だが黛は、わざとらしくあごに手を当て、何やら考える素振りを見せたかと思うと、

「いやいや、綺麗な女性にそう評価されるのは決して悪い気分ではありませんな」

にやりと薄い笑みを浮かべ、余裕の態度でそう嘯いてのけるばかりだ。

「さて。では話も決まったことですし、さっそく出かけるとしましょうか」

「え？ あ、あの」

そそくさと立ち上がった黛を引き止めるように、希恵子が声をあげた。

「その、出かけるなら、着替えと化粧を……」

困惑の色を浮かべながらも、そう訴えかける。

こんな時に何を言っているのかと自分で思わなくもないが、何しろ今は全くの普段着に家で過ごす用の薄化粧。とてもじゃないが、外になど出られる身なりではない。

「ああ、そのまま結構ですよ。車は玄関前に置いてありますし帰りもお送りします。人目につくことは全くありませんので、どうぞご安心ください」

要望をあつさり却下すると、黛はゆっくり希恵子の背後に回って、華奢な肩にぽん、と一両手を置いた。

「それに……」

伸びやかなバリトンが、頭上に響く。

「その格好の方が、興奮しますので」

「……」

口調はあくまで柔らかなまま、しかし有無を言わさぬ力で上から肩を抑えつけてくる黛に、希恵子は己に残された選択肢がもはや一つしかないことを悟った。